上三川　近代化の歩み

～明治維新から戦前まで～

富国強兵への布石～産業の近代化～

列強諸国に肩を並べるために、富国強兵のスローガンのもと、軍事力の近代化と資本主義経済の強化を目指し、明治新政府は様々な政策を実施しましたが、根幹を成すのは産業の近代化でした。早急な近代化を推し進めるため、多くの外国人技師を雇い、日本人留学生を派遣して技術の吸収に努めました。このような流れの中で、１８７０年に設置された工部省によって鉄道・鉱山、そして重工業を中心とした官営工場の整備がすすめられ、続く１８７３年に設立された内務省によって綿や絹、羊毛精製などの紡績業にも重点がおかれました。

当初、政府は綿紡績業に重点を置き、１８７０年にイギリスから最新の紡績機を10基輸入し、10箇所に工場をつくりました。その１つが真岡市下籠谷に作られた下野紡績所です。しかし、割高な国産綿花を使用し、水力を使用したため規模が小さく、経営は軌道に乗らず、１９１３年に工場は閉鎖され施設は売却されました。その中の建物１棟は移築され、外見こそ大きく変わっているものの、現在でも東蓼沼で事務所として使用されています。綿紡績業は原材料の綿花の大部分を安い輸入品に頼ったため、綿花の輸入代が綿布輸出代を上回り、外貨を獲得するための産業とはなりませんでした。

一方で、製糸業つまり生糸（絹糸）生産は、戦前における最大の外貨獲得産業でした。輸出量は１９０５年にイタリアを、１９０９年に中国（清）を上回り世界最大の生糸輸出国になりました。栃木県でも、政府や県による積極的な養蚕奨励策により、畑作地帯を中心に養蚕農家が増え、蚕の餌となる桑の作付面積も昭和５年には７７９４haに達しました。上三川町では本郷地区を中心に生産が行なわれ、明治28～37年の９年間で537石から833石と生産量が１・５倍になり、桑畑も70・８haから１４７・５haと約２倍になりました。桑畑の面積は、現在の水稲作付け面積の約10％に相当するなど、盛んに行なわれていたことがわかります。

現在の上三川町では、養蚕を行なっている農家は全くありませんが、皆さんの家の倉庫に当時の養蚕の用具が眠っているかもしれません。今も眠るその道具こそが日本の近代化、そして基幹産業としての製糸業を上三川の地で支えたものなのです。

下野紡績所の建物の一棟は、東蓼沼に移築され上三川町農協の倉庫として利用されていました。（写真：平成３年当時の様子）

広報俳句

水まわり家路急がす遠蛙　浜野正男

真青な天を鏡に朴咲けり　大八木喜重郎

つばくろめ巣立ち虚（むな）しさだけ残り　柳田石村

北鮮の埒（らち）あかぬまま梅雨に入る　伊沢静香

屋敷裏十薬己を主張せり　浜野マス子

仲直りする児を褒めてさくらんぼ　阿部信子

さみだれや大正琴のわらべ唄　野沢花枝

ばら一輪午後の紅茶の香りかな　上野キミエ

日曜日家族集ひぬ走り梅雨　石崎節子

どくだみの花に圧（お）されて引抜かず　蓬田四方